

伊都国歴史博物館開館20周年に寄せて

西 谷 正（伊都国歴史博物館名誉館長）

はじめに 糸島市は、文化財の保存・整備・活用の担当部局として市長部局に文化課を設置している。一方、文化財の公開・活用に関して、文化財の基礎的な調査・研究機関として「糸島市立伊都国歴史博物館」（以下、博物館と略称）を開設しているが、早や20年の歳月が流れた。そして、文化課と博物館は車の両輪として順調な発展を果たしてきた。その博物館の開館20周年を迎えるに当たり、主として学術面もしくは研究面から博物館の今後の展望と期待に関して私見を披露して置きたい。

志摩地域に光を 現在の糸島市は周知の通り、怡土（平野部）と島（半島部）からなっているが、怡土と島の両地域はそれぞれ独立的な地域単位である。そのことから、さかのぼって3世紀の魏志倭人伝の時代に伊都国と斯馬国（『翰苑』）とそれぞれ呼称されていた地域単位が存在したと推定できよう。中国・唐初の張楚金の撰による『翰苑』に斯馬国がみえるとはいえ、その起源については不明である。斯馬の二文字が8世紀まで遡るとすれば、自然地形の島がルーツであり、8世紀における地名の二文字表記化という、律令体制下に文字通りの地理的な島がシマ（志麻）と二文字に表記されるようになったのであろう。

この点に関して、大野城心のふるさと館の舟山良一氏のご教示によると、まず、『続日本紀』に興味深い記事がある。すなわち律令国家は和銅6年（713）5月甲子（2日）に、次のように命じた。「畿内と七道諸国の郡・郷の名称は、好い字をえらんでつけよ」と。そして、『延喜式』の巻22民部上に、「凡諸国部内郡里等名。並びに二字を用いて、必ず嘉名を取れ」と見えるのである。糸島地域では、明治29（1896）年における糸島郡の成立以前は、律令時代以来、怡土郡と志麻郡に分かれていた。倭人伝に見える伊都国が怡土郡に比定されるところから類推すると、志麻郡と志麻国もつといえ、倭人伝や『翰苑』に記載される斯馬（国）が存在したと考えられよう。

一方、斯馬国の想定に関連して、倭人伝にいう

国邑つまり国都の遺跡として、一の町遺跡が位置づけられよう。そして、斯馬国の王墓は未発見であるが、それに先立つ、農・漁業共同体の首長墓といえる久米遺跡が注目される。ここでは、弥生時代中期前半の大形甕棺墓2基から、1999（平成11）年に志摩地域で始めて、細形銅劍1本、管玉6個と細形銅戈1本がそれぞれ出土している。

志摩地域の古代総括 志摩地域には原始の旧石器・縄文時代から悠久の歴史を刻んできた。弥生時代に入って稻作と金属器の開始に特徴づけられる古代には、大きく地域的発展を果たした。「志摩国」の誕生である。続く古墳時代には、近畿地方の大和・河内などに誕生したヤマト王権は、志摩地域を志摩縣（県）として掌握したことが、結果的には、古今津湾に面した泊の地域に、県主墓として御道具山古墳などのような初期の前方後円墳築造の契機となったのであろう。なお、志摩県という呼称に関連して、平安時代末期の史料である誓願寺の創建縁起（安元元年—1175）ならびに孟蘭盆縁起（治承2年—1178）に、それぞれ志摩県と嶋県の呼称が見えることを付記しておく。また、県主は『日本書紀』神功皇后摂政46年の条に登場する斯摩宿禰を連想する。

ついで、志摩地域の律令国家時代では、正倉院文書に含まれる大宝2年（702）の筑前国嶋郡川辺里の戸籍はきわめて貴重である。一方、それに先立つ古墳時代後期の600年前後における元岡・桑原遺跡群に見る群集墳との対比研究が待たれる。ちなみに、その先例は福岡県行橋市の竹並遺跡の例がある。元岡・桑原遺跡群ではまた、8世紀における鉄・鉄器や屋根瓦の生産が重要である。その状況は、古代大宰府を抜きには考えられず、同遺跡群はさながら大宰府のハイテク・ランドの感を呈する。

嶋郡だけではなく、怡土郡についてもいえることではあるが、律令時代の郡衙や郡寺に関する調査・研究が未着手という問題も忘れてはならない。

対外関係史の問題 糸島地域は、北東アジアに

おける地理的位置から見ても、歴史的にも種々の対外関係史の重要な舞台であった。たとえば古くは3世紀の邪馬台国の時代に伊都国に唯一、一大率が置かれ、九州の内政と中国・魏王朝との外交を担当していた。つまり、その職掌は後の大宰府とも通じる外交拠点でもあった。その重要性にも拘わらず、一大率の実態は不明であり、未解決な実情にある。

古代では、『日本書紀』推古天皇10(602)年の条に見えるように朝鮮半島の新羅・任那(加耶)両国間における緊張関係に際して、倭国は来自皇子を擊新羅將軍とし、二万五千人の軍兵を授けて嶋郡に駐屯したとある。志摩地域の久米は、擊新羅軍との係わりの有無が気になるところである。また、寛仁3(1019)年に、北東アジアの沿海州地方に住み、後に金を建国した女真人が突如として九州北部を襲った刀伊の入寇がある。さらに中世に入ると、文永11(1274)年と弘安4(1281)年の二度にわたる元寇(蒙古襲来)と志摩地域の関わりの有無も気になるところである。

ちなみに、中世に関しては、古代の怡土城の故地が中世豪族・原田氏の城下町として、高祖山山城とともに再利用されているのではなかろうか。そして、原田氏の居館や名刹・金龍寺の中世における様相の解明も今後の未解決な問題として浮上する。

山と里と海の信仰 玄界灘を海路で対馬・壱岐の両島を経て、九州北岸地域を目指すと、糸島地域の山並みの中で、浮嶽が目印になる。その浮嶽の山頂周辺には中世の土師器が多数散布しているが、その付近には巨岩の立石があって、磐座として自然崇拜の信仰の依代となっていたと考えられる。しかも、そこに社殿が建てられ、浮嶽神社の上宮として機能していったと推測されよう(1)。

当館では、2016年に『国境の山岳信仰』を取り上げた。その際に、脊振山・雷山・怡土七ヶ寺に対する調査・研究の必要性が痛感されたが、その後の展開は見られないまま現在に至っている。

戦争の遺跡—戦跡考古学 最近の考古学・歴史学の新しい動向の一つとして、近・現代における戦争の遺跡が浮上している。戦跡といえば、第二次世界大戦における沖縄戦のそれが定着している。戦跡が発掘調査後に保存・整備され、さらに

は平和教育にも活用されている。

ひるがえって、糸島地域ではどうであろうか。かつて、当館の『紀要』第6号(平成22年度—2011)において、「第六三四海軍航空隊玄界基地の遺品」が紹介されていたことは、この分野の調査・研究の嚆矢であるが、今後さらなる展開が必要であろう。

ちなみに最近の2024年12月24日付『西日本新聞』(古瀬哲裕記者)によると「糸島にも戦争があった」という見出しが、この問題を紹介している。糸島市には、市民団体で、毎年夏に市民制作の平和劇を子供らが演じている。昨2024年には、沖縄戦などに関わった旧海軍の水上基地「玄界航空基地」が取り上げられたそうである(『西日本新聞』)。この記事を読むにつけ、糸島市の戦跡考古学の必要性を痛感するのである。

最後に、冒頭に述べた糸島市の文化課と、当博物館の日常的な諸活動が、当館の運営に有機的に反映されることを願ってやまない。

(2025年1月3日)

注

(1) 岡寺良 2017「九州における山岳靈場遺跡研究の現状と課題」『七隈史学』第19号、七隈史学会